

図書館だより



No. 7

平成 29 年 11 月 27 日

気温も安定せず、雨の日も多かった 10 月に比べ、11 月は秋らしい陽気を感じながら過ごすことができました。紅葉散策には行けなかったなという人も通学路や家の周りの木々の葉が日ごと色づいてゆく様子を楽しむことができたのではないのでしょうか。この後は寒くなっていく一方ですが、みなさん冬支度は万全ですか。体を冷やさない生活を心がけ、風邪を引かないようにしましょう。

10 月から上野の森美術館で開催中の『怖い絵展』が平日でも待ち時間が出るほど、人気だと話題です。ポスターになっている『レディ・ジェーン・クレイの処刑』(日本初公開)を街のあちこちで目にしますが、「この絵を生で観てみたい」と、怖い絵展に足を運ぶ人の気持ちがわかるような鮮烈な印象を心に残す絵です。『怖い絵展』は、2007 年に出版された『怖い絵』(中野京子 || 著 朝日出版社)の刊行 10 周年を記念して開催されています。本で予習をしてから会場へ行けば、より怖い絵の世界がディープに楽しめるはず。図書館で展示を行っていますので、まずは図書館へ足を運んでください。



*世界各国のあったかな飲みものたち

596.7-セ 『世界のホットドリンクレシピ』 誠文堂新光社

「冬と言えばこの飲み物！」で、みなさんは何を思い浮かべますか。ミルクティー、カフェラテ、おしるこ、どれも心と体が温まるおいしい飲み物ですが、世界中には他にも冬に嬉しい温かい飲み物がたくさん存在するのです。文化や気候に合った特徴を持っていたり、その国ならではの香辛料などが使われていたり、国ごとの個性がよく出ていて旅した気分を楽しめる魅力的な飲み物とそのレシピが紹介されています。ペラルーシやエジプト、オーストリアなど、あまり馴染みのない国の飲み物にも「どんな味がするのだろう」と興味が湧きます。今年の冬はいつもとは違った飲み物で、ほっこりと温まってみませんか。

*美しいだけでない絵画

723-ナ-2 『怖い絵 2』 中野京子 || 著 朝日新聞社

中野京子さんの怖い絵シリーズの第2弾。ここにドラローシュ作『レディ・ジェーン・クレイの処刑』も紹介されています。イングランド最初の女王を宣言しつつも、わずか9日間で退位させられ、半年後、16歳の若さで処刑台に立たされたジェーン。その悲運な生涯を追いながら、絵の解説がされています。絵から伝わる深い悲しみがどこからやってくるものなのか、知った上で絵を見返してみてください。他にもピカソの「泣く女」やミレーの「晩鐘」なども掲載されています。この本で初めて目にするという作品もあるかと思いますが、これをきっかけに歴史ある絵画とその背景を色々知ってみてください。

蔵書点検が始まります

図書館閉館期間

12月7日(木) ~ 12月21日(木)

今年も上記の期間、図書館は蔵書点検を行います。蔵書点検では、図書館で所蔵している本が行方不明になっていないか、きちんと正しい場所に配架されているかを確認します。そのため、蔵書点検の期間中の図書館は本を移動しないよう閉館します。なお、閉館中もコピー機の使用と本の返却は可能です。みなさんには、不便をかけてしまいますが、円滑に蔵書点検が行えるよう協力をお願いします。また、記念館自体は通常どおりに開館していますので、生徒ホールやピアノ室を利用することは可能です。

蔵書点検に伴い、みなさんにもうひとつ大事なお願いです。

本を延滞している人は
蔵書点検までに必ず返却してください。



ノラネコぐんだん、新宿に現る!?

絵本作家 工藤ノリコさんの人気シリーズのひとつ「ノラネコぐんだん」シリーズ。毎度毎度、悪さを企んでほとんどでもない事態を巻き起こしてしまうノラネコたち。でも、どこか憎めない愛らしいキャラクターは子どもだけでなく、大人の心もホッと和ませてくれます。

そんなノラネコぐんだんのコラボカフェ『NORANEKO CHAYA』が新宿紀ノ国屋書店に期間限定でオープンしています。期間は11月30日(木)までと残りわずか！おいしいスイーツを食べた後には、同時開催されている6階児童書売り場『ノラネコぐんだん絵本フェア』にも足を運んでみましょう。ノラネコぐんだんのかわいいオリジナルグッズが販売されています。

E-ク 『ノラネコぐんだんおすし屋さん』 工藤ノリコ || 著 白泉社

今回、ノラネコぐんだんが狙いをつけたのは、ワンワンちゃんのおすし屋さん。おいしそうなおすしに心惹かれたノラネコたちは、夜中にこっそり仕掛けを作り、あの手この手で何とかおすしを奪ってしまおうと企みますが、ちっともうまくいかないどころか大惨事をまねいてしまいます。

うらやましそうにおすしを眺める顔、頬かむりをして悪さをしている様子、怒られてシュンとしている姿、どれも可愛らしくて、ページをめくる度、笑顔になってしまいます。工藤さんの絵はすみずみまでしっかりと描きこまれていて、食べ物や建物、雑貨まで、ずっと眺めていられる楽しさがあります。

日本の誇れる文豪たち ~近くて遠い昭和作家編~

近くて遠い昭和作家編の2人目は芥川龍之介です。前回ここで紹介した太宰治が尊敬してやまなかった人物です。

初期の頃に書かれた『羅生門』は今でこそ彼の代表作ですが、発表当時は文壇からほとんど注目されませんでした。しかし、続いて発表した『鼻』で夏目漱石から賛辞を受け、新鋭作家として文壇出発の第1歩を踏み出しました。

中期には芸術至上主義とも言える世界を作り出し、『蜘蛛の糸』や『地獄変』などを発表。作風の転換をはかり、現代生活を題材に書かれるようになった晩年は健康を害し、精神的な衰弱も進んでいきます。そして35歳の芥川は「何か僕の将来に対する唯ぼんやりとした不安である」という言葉を遺し、短い生涯を閉じました。晩年の代表作である『河童』には、その頃の芥川の痛ましい現実が反映されていると言われており、彼の死を考える上で欠かせない作品となっています。



*作品とその背景を知る

B913.6-7 『芥川龍之介の「羅生門」「河童」ほか6編』 角川書店

この本では、本編に加え、作品の書かれた背景、作品を読むヒント、コラム、エピソードなどが併せて載せられています。芥川作品を深く読み解きたい人にはもちろんですが、今まで芥川龍之介をあまり読んだことがなかった人が読むツボを押さえるのにも役立ちます。

初期の代表作『羅生門』と晩年の代表作『河童』を読み比べてみて、その作風の違いを感じてみるなど、作品ごとの特徴を掴みながら読んでみてください。

『河童』は、ある精神病院の患者の話です。穂高山で怪我を負った彼は、河童に保護されたと言います。河童たちの習慣はとんちんかんに見えて、でも河童視点だと人間たちだって同じようなことをしているのだとか。ユートピアか、人間社会の縮図か、貴方も河童の国を覗いてみませんか。

杜子春の心を揺さぶった光景とは*

B913.6-7 『蜘蛛の糸・杜子春』 芥川 龍之介 || 著 新潮社

表題2作を含む、10編が収められています。ここでは、その中から『杜子春』を紹介します。財産を使い果たし、その日の暮らしにも困る有様の杜子春は或る日の暮方、仙人と出会う。仙人のおかげで、再び財を得るも散財し、また路頭に迷う。その繰り返しの末、人間の薄情さに嫌気が差した杜子春は仙人に財ではなく、自分を弟子にしてほしいと頼む。願いを受け入れた仙人は「決して声を出してはいけない」と言いつけ、姿を消す。残された杜子春には次々と災難が襲いかかる。仙人が与えたこの試練によって、杜子春は何よりも大切にしなければいけないことに気づきます。声を出してはいけないと言われ、あらゆる災難に耐えた杜子春が発した心からの一言が読み手の胸を打ってきます。杜子春のその一言が何だったのか、想像しながら読んでみてください。

少女が蜜柑に込めた思い*

B913.6-7 『舞踏会・蜜柑』 芥川 龍之介 || 著 角川書店

こちらは表題2作を含む、16編が収められ読み応えのある1冊です。先月号では梶井基次郎の『檸檬』を紹介しましたが、芥川龍之介は『蜜柑』という作品を書いています。ある曇った冬の日暮れ、言いようのない疲労と倦怠を抱えた私は、横須賀発上の二等客車に乗る。車両には珍しく他の客はいない。そこに出発間際、飛び込んできたひとりの少女。何やら落ち着きのない様子で窓の外を気にする彼女の行動が挙動不審に見え、いちいち私の心を苛立たせる。やがて汽車はトンネルへと入るが、そこで少女への怒りも頂点に達する。しかし、トンネルを超えた先で少女がとった思いも寄らない行動が私のそれまで抱えていた感情を吹き飛ばす。不穏な空気が漂う物語を最後に一転させる『蜜柑』の存在。何が起こったのかその目で確かめてください。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

来月17日(日)に行われる「県民と図書館のつどい2017」(桶川市民ホール・さいたま文学館)では、**柚木麻子**さんが記念講演をされるとのこと。代表作の『ランチのアッコちゃん』は読んだけど、そういえば最近読んでいないなと思い、『**ねじまき片想い**』(913.6-1 東京創元社)を読みました。主人公の富田宝子の職業はおもちゃプランナー。社内のエースとして誰もが一目置くような実力を持ちつつも、恋愛になると周りがハラハラしてしまうほど不器用になってしまうのが可愛いところ。ですが、その彼が「部屋からスカイツリーが見えなくなった」と言えば邪魔になっていた貯水タンクをどけ、彼の大事な恋人が犯罪に手を染めそうになれば全力で阻止し、「宝子さん、暴走しすぎじゃ…」と思えなくもないのだけど、その鮮やかな行動力と洞察力はお見事！読みながら、拍手を送りたくなります。そこまで全力ならどうにか両思いになってほしいのですが、簡単にいかないのが恋なんですよ。そうこうしている内に恋の構図は複雑化していき、誰と誰が恋人同士になるのか最後まで目が離せません【今井】



映画「ちはやぶる」を見ていたら、旅に出たくなりました。高校生らが真剣に競技かるたに取り組む本筋も面白かったのですが、新幹線に乗って車窓を流れる雄大な富士山を、私もこの目で見たくなったのです。思えば、「冒険」とも言い換えられるようなドキドキする旅を最後にしたのはいつでしょう。根が小心者なので、ほんのちょっとした事にも不安を感じたり、ためらったりしてしまう私ですが、この場所に来るのはこれが人生最後かとも思い定めると、存外やれることもあるのです。旅のよい効果ですよ。そんなことを思っていると「旅する主人公になりたかった」という人を見つけました。『テルマエ・ロマエ』のヤマザキマリさんです。『**国境のない生き方**』(914.6 小学館)によると『ニルスの不しぎな旅』(ラーゲルレーヴ)を読んで渡り鳥にあこがれて育ったそうです。「人生は一度きりなんだから、無駄にできる時間はこれっぽちもない」「本気でやりたいことがあると、人は強くなれる」その潔い生き方は、憧れです。【鈴木】